

〔論文〕

保育所保育指針における 乳児保育の実践構造の検討

—乳児保育研究 その2—

大方 美香

Mika Oogata

大阪総合保育大学

要旨：本論文は、乳児保育の実践構造、すなわち乳児への働きかけの構造を解明することを目的とする。近年、乳児保育の重要性が指摘されているが、乳児保育の実践構造という基本的問題も解明されたとはいえない。そこで、大方ら（2012・2014）は、1965年及び2008年保育所保育指針を使って実践構造のモデルを検討し、1965年保育所保育指針より①単純活動モデル、②望ましい活動重視モデル、2008年保育所保育指針より③ねらい重視モデル、④主体重視モデルの4つのタイプを抽出し乳児保育の実践構造を理論的に提案した。この提案に基づいて、乳児保育の具体的な事例における実践構造を本論文では検証する。

事例を検討した結果、4つのタイプが全て抽出され、かつ、指導計画は、年間・月間ともに①と②のタイプが多いことがわかった。また、年間と月間を比較すると月間のほうが①のタイプが多いこと、さらに、週案を付け加えて検討したところ全て同じタイプを使用している「一貫型」といろいろなタイプを使っている「多様型」があることが分かった。

このことから、乳児の実践には多くのタイプがあるが、各々タイプには意味があり、どれがよいかとはいえない。むしろ各々のタイプごとの課題を整理し、ねらいと内容の統合的理解の仕方、また、子どもの活動の理解の仕方を整理する必要があることを指摘した。今回の検討を参考にして、実践構造での指導計画の分析へと発展させる必要がある。4つのタイプは、乳児保育の実践構造の質的検討をするためには有効な分類であること、特に、乳児の生活における子どもと保育者の内的側面についての客観的な分析によって、乳児保育の実践構造の適切性を検討する必要性が示された。

キーワード：乳児保育、指導計画、保育所保育指針

I 問題の所在

1、乳児保育の実践構造解明の必要性

保育学の貢献は、乳児保育における保育実践を豊かにすることが緊急の課題となる。というのは、幼稚園と保育所の関係については「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の検討が行われ、幼児教育については一定の理解が深まっているが、「乳児保育」ではどのような働きかけをするかの課題は残されたままである。乳児保育の実践の多くは、保育現場の「創意工夫」にゆだねられ、各保育者の判断に任されてきた傾向にある。

そこで、保育実践を豊かにするということは、「保育実践がどのような構造を持っているのかを知る必要がある。」という問題意識を持つ必要がある。こうして初めて、どのような保育方法で保育に臨めばよいのか、どのような視点から保育の振り返りを行えばよいのか、明日の保育にどのようにつなげていくのが解明されると考えられる。

この問題意識は、横松ら（2007）が「保育全体を構造的に捉えることは、保育者の役割や指導性を明確にすることにつながり、現実の保育所・幼稚園において豊かな指導をより確実に実現する上で必要であると考えられる。今日、豊かな指導をより確実に実現する志向性が強まっているといえ、そのための理論的研究は、筆者らも重要であると考え。」と述べ、保育者が「自らの願う経験も考え直しつつ保育内容構造論として構築・再構築していくことが重要である。それが可能になれば、保育者の役割や指導性を明確にする議論も必要なくなり、愛情と共に知性の磨かれた保育者の保育実践が期待できるのではなからうか。」と述べていることから理解される。また、光本（2000）も研究の現状として「保育実践全体を構造的に捉えようとしているが、乳児保育には言及していない」と評価している。「保育の構造」という概念は、1980年に金田利子が教育心理学会における自主シンポジウムで「乳児保育における発達研究の理論と方法をめぐって—保育の構造と子どもの発達—」と企画して

いる。金田はその趣旨として「乳児保育の全体構造をとらえ、その中で、乳児の保育実践、とりわけ、発達と保育実践がより明確になりやすい乳児の保育実践をとりあげ、その実践の到達点についての共通理解を得ておきたいと考えた。また、乳児期の研究は、最近きわめて盛んになっているが、分野別の研究が多く、その相互の関連性や統合性を重視した研究がまだまだ少ない。乳児期の研究を「乳児保育」においてみようという方向は、まさに、この関連性、統合性をはかる乳児研究の方法であると考えられる。」と提案している。

また、大方ら（2012・2014）は保育所保育指針を検討して乳児保育の実践構造を整理し、4つのタイプを抽出し、以下の通り提案した。

2、保育所保育指針が提起する乳児保育の実践構造

大方ら（2012・2014）は保育所保育指針を検討した結果、主な結論として次の5点を提示した。

1) 乳児保育の実践構造として、1965年と2008年保育所保育指針には重大な違いが存在している。

1965年保育所保育指針は、保育内容である活動分化の視点から「生活・遊び」→「健康・社会・遊び」→「健康・社会・言語・遊び」という実践構造を持っていたが、2008年保育所保育指針は、0歳児を除いて、「養護」プラス「健康・言葉・環境・関係・表現」に変化した。したがって、乳児保育独自の実践構造はなくなったことになる。

2) 乳児保育の実践構造として、1965年保育所保育指針は、「活動・経験」の視点から内容を方向付けようとしていたが、2008年保育所保育指針は保育の「ねらい」の視点から「養護」プラス「健康・人間関係・環境・言葉・表現」を方向付けようとした。

したがって、厳密に言えば、「健康」という同じ用語でも、1965年保育所保育指針は健康活動であり、2008年保育所保育指針は「健康」の「ねらい」といえる。

3) 乳児保育の実践構造として、1965年保育所保育指針は「生活活動と遊び活動」が実践構造の中核になる。

1965年保育所保育指針の「活動」は、達成すべき目標として位置づけているため、「望ましい経験と活動」と示すことから「望ましい」という保育の「ねらい」を含んだものになっている。このため、「ねらい」はむしろ「活動内容」を表すことになっており、わかりやすい実践構造ともいえる。同時に、特定の活動に追い立てる可能性も含まれる。

4) 2008年保育所保育指針の「ねらい」は、「心情・意欲・態度」という形で実践構造が示され、さらに「養護と教育（5領域）」という「ねらいと内容」で提示され

ている。

乳児保育の実践構造は、「領域」ごとの「ねらい」の実現と考えれば、「養護と教育（5領域）」が実践構造といえる。一方、「総合的に考える」という立場から考えれば、「ねらい」は、「子どもが保育所において、安定した生活を送り、充実した活動ができるように、保育士等が行わなければならない事項及び子どもが身につけることが望まれる心情、意欲、態度などの事項を示したものである。」と示されていることから、保育者がする事項と子ども発の活動への援助が実践構造であるとも言える。

5) 2008年保育所保育指針では、2歳未満までの場合に、個別の指導計画を必要としている。実践構造と指導計画の乖離が大きくなるが、集団保育における指導計画についてどのように編成するかは、「生活・遊びの流れに依じて」と書いてあるに過ぎない。これも適切な判断が現場に期待されている。このため、乳児保育の実践構造は、保育士等が行わなければならない事項を除き、子どもの環境へのかかわり次第ということになり、保育者の創意工夫しだいで多様な保育実践が可能となる。

以上のことから、大方ら（2012・2014）の検討は、乳児保育の実践構造の方向は一つではなく、むしろ多様な方向を含むものであることを示している。その結果、次のように4つのモデルを提示した。このモデルを「活動」の理解（玉置2002）をふまえて補足して説明すると以下の通りとなる。

3、4つの実践構造モデルの理解と発展

1) 単純活動モデル（図1）

単純活動モデルは、図1に示すように保育内容の区分を提案し、さらに3つに分けられるが、特徴としては活動、特に外的活動・経験を軸にすることを基本としている。

このモデルのポイントは、「活動」の視点から領域を分け（表1）、また、「活動の分化」として領域の分化を想定していることである。領域区分から示されている内容である。このモデルは、さらに活動内容を細分化して示すことが可能であり、図1-1～図1-3で示している。乳児の保育を実際に実施するには、図1-1～図1-3が示すように「遊びと生活」の関係によって多様な実践活動が考えられる。また図1-1が示す「生活としての活動」の中には「基本的生活習慣」が一部含まれる。

何らかの「領域」を設定することは当然であるが、子どもは人間としては一体であり、部分的に順番に育つのではない。様々な身体性や精神性が一体となって総合的に育っていく。また、乳児保育は生活が軸となって実践が行われる。子どもの活動を理解するとき、「領域」か

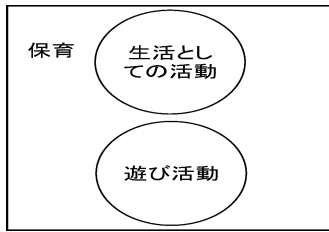


図1-1 65 指針 実践構造

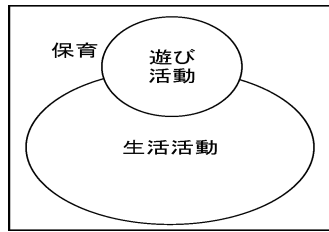


図1-2 65 指針 実践構造

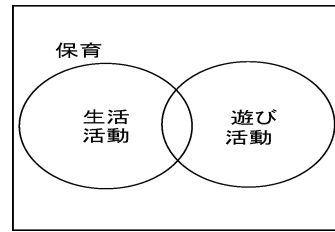


図1-3 65 指針 実践構造

(図1-1～図1-3では、1965年保育所保育指針を65指針と略して表記している。)

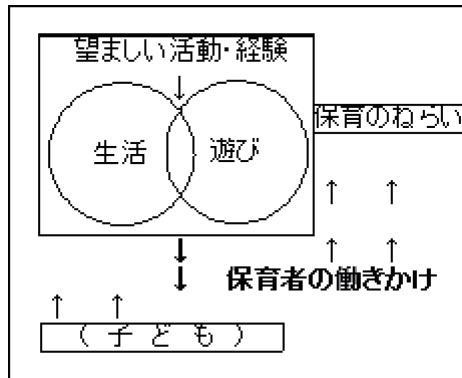


図2 65 指針 実践構造

ら考えるのか、「生活」から考えるのかによっても乳児保育の実践構造は異なってくる。人間は生理的に未成熟な状態で生まれ、生まれてからの周りの環境を通して育つ。すなわち、子どもはあらゆる環境、生活文化に適応して生きていく(ここでは生活適応活動とよぶ)。ことを前提としたとき、むしろ「領域」と「生活」の統合的理解が求められることを提案した。

表2の事例(待井1984)は、1才児6月の月間指導計画である。「活動の展開」として「生活」「遊び」がある。生活の前期には、「スプーンを使って食べる」、遊びの前期には「室内で体育遊びをする」と書かれている。このことは、①単純活動モデルは「生活・遊び」の外的活動に着目しているといえる。

乳児は環境に適応し、人との関係によって生きることが前述した。そのように考えると、乳児保育は、単なる生活活動であるよりもむしろ、人間として基礎的な「生活適応活動」がまず乳児期の保育内容であると考えられる。その中で、保育の目標・ねらいを実現していくことになることが基本である。したがって、生活適応活動が保育内容であると考えられることは可能であり、保育内容とは子どもの活動そのものと考えられる。しかし、子どもの活動の視点は外的活動として示されているが、子どもの活動は内的活動、内的操作を欠かすことはできない。

表2に示される「スプーンを使って食べる」という生活は、子どもなりのやり方もある。スプーンという道具を使うことは手の操作が求められる。同じ時期に「感覚遊びをする」となっており、その遊び活動を通じて手の操作性が育ち、「スプーンを使って食べる」生活活動につながる部分は統合しているともいえる。また大人とのスプーンのやり取りという行為を習得する過程の中で、子どもなりに動機付けという内面の活動があると考えられるならば、子どもは内的活動をしていると考えることもできる。指導上の留意点では、「一人ひとりの食べる量を知り、適量を与えて残さず食べる喜びを知らせる」と書かれている。活動を起点とする場合には、活動における子どもの気持ち・子どもの行う内的操作を念頭におくことで単に「させる活動」という視点から脱却できるのではないかと考えられる。

表1 保育所保育指針における領域区分

区分	保育計画	6か月未満	1歳3か月未満	2歳まで	2歳	3歳	4歳以上
1965年	保育計画・指導計画	なし	生活遊び	生活遊び	健康・社会・遊び	健康・社会・言語・遊び	6領域
2008年	保育課程・指導計画	養護と教育(5領域) 年齢の記述なし					

2008年：養護(生命の保持と情緒の安定)、5領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)、1965年：6領域(健康・社会・言語・自然・音楽リズム・絵画製作)、1990年・1999年は養護が基礎的事項である他は2008と同じ

表2 単純活動モデル事例（待井和江 1984「乳児保育」ミネルヴァ書房 p. 236-237）

6月の指導計画	1歳児	健康安全管理	・歯科検診を受けさせて、口すすぎの習慣を付ける ・梅雨のため、戸外遊びが少なくなるので、活動的な遊びを取り入れ、エネルギーの発散を図る ・入浴やシャワーをしないときは、午睡前に体をふく ・温度差が大きいので、衣服の調節をまねにする	・歯科検診 ・身体測定 ・避難訓練 ・誕生会	
主題 ねらい	私と友達—保育者を仲立ちとして— ・全身を使って元気に遊ぶ ・友だちと一緒に、いろいろな感覚遊びを楽しむ	健康安全管理			
	子どもの姿	活動の中心	活動の展開	指導上の留意点	
前期	・スプーンを持って食べようとするが、手づかみが多い ・おまるや便所で排泄するのに慣れる ・よく遊び、ぐっすり寝る ・少し高いところ(10-15cm)に登ったり、降りたり、トンネルをくぐるの遊ぶ ・名前を呼ばれるのを喜ぶ ・動物の擬声語を喜ぶ	・なんでも一人でしようという気持ちをもつ ・全身を使っていろいろな遊びをする	生活 前期 ・スプーンを使って食べる ・おまるやトイレで排泄する ・自分のふとんを覚える ・促されて手を洗う ・いやがらずに顔や体をふいてもらう 後期 ・残さず食べる ・食後、フクフクうがいをする ・排泄の言葉や動作で知らせる ・排泄の際、女兒は紙でふこうとする ・あいさつの後、自分のふとんに入る ・せっけんで手を洗う ・入浴やシャワーを喜ぶ ・いやがらずに歯科検診を受ける ・こわがらず避難訓練に参加する	・一人一人の食べる量を知り、適量を与えて残さず食べる喜びを知らせる ・一人でやろうとするとときやいつるとき、励ましの言葉をかけ、意欲をもたせる ・午睡時、なかなか寝つかないときは、手遊びなどをして遊びの満足感をもたせ、寝つきをよくする ・歯科医は白衣でないものを着用してもらい、安心させる	・室内遊戯の安全の確認と消毒をする ・通気性をよくするように、部屋の模様替える ・感覚訓練のための玩具を作る 空宝箱、またはプラスチックケースに厚紙でふたをして切り込みを入れておく
後期	・促されてよくかんで食べる ・パンツを上げたり、下したりする ・積み木や平均台の上を歩いたり、 ・マットの上を転がるのを喜ぶ ・おもちゃの取り合い、奪い合いが盛んになる ・絵本の言葉をまねて言える ・紙破りを面白がる	・絵本で遊ぶ ・感覚遊びをする	遊び ・室内で体育遊びをする マットの上を転がったり、はずんだりする ダンボール積み木に乗ったり、くぐったりする とび箱から飛び 介助されて、トランポリンではずむ ・レコードに合わせて体を動かす(体操「げんきにいちに」、マー ・したいこと、してほしいこと、身振りや動作で表す ・絵本の言葉をまねて言う ・感覚遊びをする 紙で遊ぶ(いじくる、破る、はがす、つき破るなど) はめ込み遊びをする	・うまく転がれない子には手を添える ・マットの上にO印を置き保育者が、両手を持ってはずませる ・状況判断で子供の要求を先取りせずに、「〇〇したいの」「〇〇ちょうだい」など保育者が言葉をかけ、要求を引き出す ・プラスチックケースやダンボール箱に、ビニルテープやシールなどを貼ったりはがしたりさせる	牛乳びんのふたにエナメルを塗る 箱の切り込みに牛乳びんのふたやアイスクラスを差し込んで遊ぶ ・いろいろな紙(トイレットペーパー、バラフィン紙、包装紙、色紙、ビニルテープ、セロテープなど)
家庭連絡	・うがい、歯磨きを家庭でも協力してもらう ・下着類を清潔にし、十分用意してもらう ・くつ、洋服など、一人でできるものを選んでもらう(かぶって着る服、運動ぐつなど) ・歯科検診の結果、月例身体測定結果を知らせる	健康安全管理	クラス運営 ・一人一人の発達を把握するために、個人記録をつける ・独り遊びを十分楽しませるように、遊具、玩具などを用意し、配置に気をつける ・保育者と1対1の触れ合いを十分楽しませ、徐々に2-3人のグループ活動を試みていく		

2) 望ましい活動重視モデル (図2)

②望ましい活動重視モデル (図2) は、1965年保育所保育指針における実践構造のもう一つのタイプである。表1に示すように保育内容の区分を提案していることは、モデル①と同じである。ただし、保育内容の中心は望ましい活動・経験であるので、「保育計画は、在所する各年齢の乳幼児の『望ましい活動を選択、配列』し、また、全体として一貫性をもったものとなるよう作成され

なければならない。」とし、全体計画は活動を選択して一貫したものとなるようにと考えている。①との違いは、「内容」だけではなく、活動は達成すべき目標として位置づけていることである。このため「望ましい経験と活動」は、すでに「望ましい」という保育のねらいを含んだものとなっている。ねらいは活動内容そのものを表示することになり、実践構造としてはわかりやすいといえるが、外的活動に焦点があたっている。望ましい活動が

表3 望ましい活動重視モデル 年齢別年間保育計画表 (大方美香 2014 総合保育双書2「乳児保育計画論」ふくろう出版 p38より引用)

	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
食事	<ul style="list-style-type: none"> *正しいスプーンのもち方で一人で食べる。 *いろいろな食品や調理道具になれ、楽しく食べる。 *食後、決められた所にコップやエプロンを片付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> *正しい箸使いになれる。 *食器を正しく持って、何でも食べる。 *食前食後の用意や片づけを促されて自分でする。 	<ul style="list-style-type: none"> *正しい箸使いで食事をする。 *こぼさないで何でも食べる。 *食器の正しい位置を意識する。 *食前食後の準備・片づけを自分でしたり、当番活動をする。 	<ul style="list-style-type: none"> *正しい箸使いでこぼさずに食べる。 *食事マナーを守って一定時間内にたべる。 *食器を正しい位置に置く。 *自発的に食前食後の準備・片づけをきちんとする。 	→

明確なだけに、表3（大方美香 2014 総合保育双書2「乳児保育計画論」ふくろう出版 p38 より引用）のように外的活動としての「ねらい」として「～をする」・「～をさせる」ことそのものがねらいとなってしまう可能性がある。乳児保育の実践構造では、大人の子どもへの働きかけという関係性が重要な意味を持つ。

例えば、乳児が「コップを持つ」ことを考えるとき、身体的には「持つ・つかむ・持ち上げる・運ぶ」といった要因が考えられる。一方、「自分で持った」、「楽しんだ」といった表現的な要因もある。また、「コップ」という物的環境や生活文化への適応活動ともいえ、「コップ」という物への認知的要因もあるといえる。また大人が「コップだよ」「はいどうぞ」といった呼びかけや関わりといった社会的要因も含まれる。「生活適応活動」とは、総合的であり、特定の力や部分を育てることではない。

同時に、「生活適応活動」は、乳児からすれば「自分がやろうとすること」と「自分の能力水準」に段差がある。例えば、コップを取ろうとしてもうまく取れないように（大筋力から小筋力への分化、快・不快からしつと喜びへの分化など）、成長や発達には順序性がある。さらに、人との関係において、乳児は大人にコップをとってほしいとき、自分ができないことを大人に援助を求めたりすることもある。

3) ねらい重視モデル (図3)

ねらい重視モデル (図3) は、2008 年保育所保育指針における実践構造の一つのタイプである。2008 年保育所保育指針の特徴は、「ねらい」が「心情・意欲・態度」という実践構造で提示されていることである。「養護と教育」が「ねらい」としてしめされているものの、領域ごとの「ねらい」の実現と考えれば、「養護プラス教育 (5 領域)」の「領域」が軸となる。乳児保育の実践構造と理解することもできる。つまり発達の面からの「領域」を立て、さらに「ねらい」を「心情・意欲・態度」で示している。これは、活動から離れた実践構造を考えること

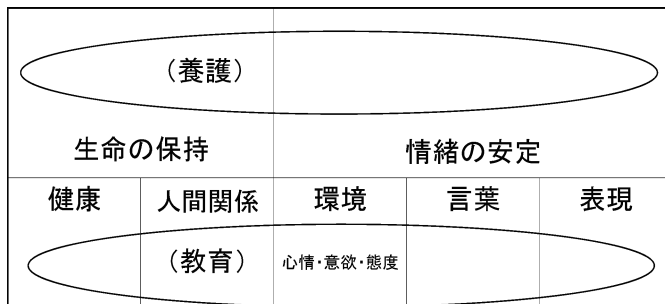


図3 2008 保育所保育指針 実践構造

になる可能性もある。乳児保育の実践構造においてはどのような内容をすればよいかのかわかりにくいとも言える。

2008 年保育所保育指針における 1 歳児の年間指導計画 (乳児保育研究会 2010「資料でわかる乳児の保育新時代」ひとなる書房 p98～p99 より引用) には、「発達課題」「保育の内容 (生活・人との関わり・遊び)」「保育者の関わりと配慮」が書かれている。「育てたい子どもの姿」には『『自分で』という気持ちが芽生え、生活や遊びを通して、簡単な身の回りのことを自分でしようとする。』『安心できる保育者に見守られて、身のまわりの様々なものに好奇心や関心をもち、からだを動かしたり、ことばを使ったりすることを楽しむ』と書かれている。それを受けて、「ねらい」には「一人ひとりを受容し、信頼関係を築く中で、新しい環境に慣れ、情緒の安定を図る。(養護)』『安心できる保育者と好きな遊びをする。(教育)』と書かれている。1 歳の発達課題は「離乳の完了」「歩行」「ことばの発生」である。「保育の内容 (生活・人との関わり・遊び)」は、「保育者に食べさせてもらったり、手づかみやスプーンを使ったりして食べようとする。』『スプーンやフォークを持って、こぼしながらもひとりで食べようとする。』というように「ねらい」に重点が置かれている。

4) 主体重視モデル (図4)

図4に示されるように、2008 年保育所保育指針における実践構造のもう一つは、環境を通して「子どもの主体的活動」による子どもの育ちを大事にする。したがって、2008 年保育所保育指針は、「子どもの主体性の尊重と計画性のある保育」を目指し、そのバランスをとることが示唆されている。「最善の利益」といっても漠然とした方向付けを超えないものである。「子どもの主体性の尊重」という言葉には、子どもの主体的活動が中心となることが予想されているが、保育所・保育者の指導計画の編成に拠るとい面も持っている。このため、保育の計

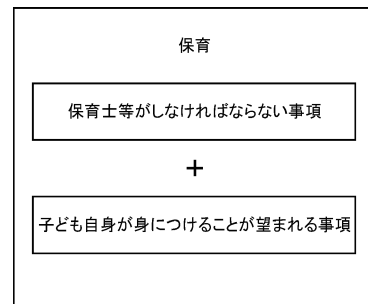


図4 2008 保育所保育指針 実践構造

画（保育課程と指導計画）は、「安定した生活を送り、充実した活動ができるように編成し、一貫性のあるものとする」と述べている。「生命の保持と情緒の安定」という「養護」は65指針の生活ではなく目標として位置づけ、「5領域」は65指針の活動としての「遊び」ではなくやはり目標になっていることに留意したい。しかしながら、「保育者がする事項」としての「保育士等がしなければならない事項」と「子ども発の活動への援助」としての「子ども自身が身につけることが望まれる事項」という2つの事項をねらいに示すことから、保育者の働きかけを考えているともいえる。

2008年保育所保育指針の事例（増田まゆみ2009「乳児保育」北大路書房p124～p125より引用）では、0、1歳児の年間指導計画は、「年間目標」「季節的な配慮」「発達の道すじ」「環境構成のポイント」「保育者の関わり（育ってほしい内容を含む）」「家庭と一緒に」となっている。「年間目標」には、「保健的で安全な環境のもとで、生命の保持と生活の安定を図る。（養護）安心できる保育士との応答的な関わりをなかで、情緒の安定を図りながら信頼関係を築いていく。（養護）個人差に留意し、運動機能の発達、言葉の獲得への意欲を助ける。探索活動を十分にし、聞く、見る、触れるなどの経験をし、興味や好奇心を育む。（教育）」また、「発達の道すじ」には、「手づかみで食べる。コップを持って飲もうとする。好き嫌いが出てくる。スプーンやフォークを持って食べようとする。」となっている。「保育者の関わり（育ってほしい内容を含む）」には、「咀嚼の発達に合わせて調理を工夫し、食べることへの関心を育てていく。」「食べさせてもらったりこぼしながらもスプーンやフォークを使って一人で食べたりして食事への意欲を大切にする。」というように、子ども主体の実践構造である。このように、④主体重視モデルは、子どもが主体的に環境と関わることを軸としている。しかしながら、「保育者の関わり（育ってほしい内容を含む）」にかかっているように、保育者という大人の役割や意思は影響するといえることから、内的操作に視点をおいたと考えられる。

II、本論文の課題と方法

1、検討課題

この4つのモデルは理論上乳児保育のあり方を検討するために提案した。ここでは「この4つのモデルが実際の指導計画に生きているのか」ということを検証し、このモデルの具体的な展開を本論文の課題とする。具体的には次の3つの課題を検討する。

課題1としては、乳児保育においてこの4つのタイプは活動を軸にすることで実践構造が一貫したものとなる可能性を示していることを検討する。各事例においては全てのタイプが存在しており、その多くは活動型である。「生活・遊び」の外的操作に着目している①単純活動タイプの特徴は活動、特に外的活動・経験を軸にすることを基本としている。②望ましい活動重視タイプは、保育内容の中心は望ましい活動・経験である。また、「保育計画は、在所する各年齢の乳幼児の『望ましい活動を選択、配列』し、また、全体として一貫性をもったものとなるよう作成されなければならない。」とし、全体計画は活動を選択して一貫したものとなるようにと考えている。①との違いは、「内容」だけではなく、活動は達成すべき目標として位置づけていることである。このため「望ましい経験と活動」は、すでに「望ましい」という保育のねらいを含んだものとなっている。①②のモデルは、子どもの活動に視点をあてた実践構造であった。しかし、子どもの活動は外的活動だけではなくむしろ内的活動に視点をあてることが大切であり、子どもと保育者の内的側面を考えなければならないことに気づかされる。③のねらい重視モデルは、子どもと保育者の内的側面を生かそうとして生まれてきたといえる。乳児は人との関係性が大切であることは理解されている。しかし、実際の乳児保育は集団保育であり1対1対応ではない。乳児保育は子ども同士の関係性には焦点があたっているが、子どもと保育者の内的操作という働きかけについては具体的に整理されていない。④主体重視モデルは、このことを生かそうとして生まれてきたといえる。

課題2としては、長期指導計画（年間指導計画及び月間指導計画）及び短期指導計画（週案）においてこの4つのタイプはどのように使われているのか、3つの指導計画で一貫している指導計画となっている場合を「一貫型」とよびその内容を検討する。また、図5に示されるように、先に述べた理由から変更した場合（×の部分）を「多様型」と名づけその内容を検討する。

カリキュラムの編成の理念としては（図5参照）、1965年保育所保育指針は、「望ましい活動」という考えに基づく実践プランであり、2008年保育所保育指針は「子どもが環境と関わっての主体的活動」という考えに基づく実践プランであり、二つの考え方があることを提示している。前者はそのまま実践プランとなる可能性が高く、後者は実践プランの枠組みを含めて現場で考える必要がある。

乳児保育の実践構造からみると、2008年保育所保育指針は、領域ごとに分けた指導計画と子ども主体の指導計

画という2つのタイプが考えられる。養護と教育（5領域）から保育課程を編成し、そこから指導計画を作るため、指導計画と実践プランの間にはねじれが生じることが考えられる。「多様型」と名づける。同じことは、長期と短期の指導計画との間にも生じる可能性がある。これに対して、1965年保育所保育指針は、活動の選択だけではなく配列をするので長期には主要な活動を書くことが想定でき、短期にはある程度の保育形態を決めておけばそれがそのまま実践プランになることがわかる。「一貫型」と名づける。こうしたねじれはどのように解消されているのか、保育現場にゆだねる論理として「総合的に考える」、「適切に考える」、「〇〇を考慮して」、などの用語が使われている。ねらいや内容は、子どもの実態から実践プランは保育者が作るものとされている。指導計画という本来保育実践が想定されているはずのものが、いつの間にかそこに隙間が生じている。その指摘を図にしたのが図5である。2008年保育所保育指針は、指導計画の部分でねじれが生じていることが読み取れる。×印の部分には断絶がある可能性を示し、それは保育現場の創意工夫にゆだねられていることを示している。

課題3としては、この4つのタイプではねらいと活動をどのように統合しているのかを示し、新たな統合のあり方を方向付ける。特に、両者を統合する視点からの乳児保育の実践構造を提示する。

両者の調和や統合をどのように図るのが実践構造として必要である。「子どもの最善の利益」を追求する「保育実践」の中で、4つのタイプが示すいいところを持ち合わせた指導計画の作成が課題である。

融合の保育では、「保育の理念」（保育方針を含む）を提議し、それを踏まえた子ども像を提案する。これは、子どもの願いを踏まえつつ、保育する側の「考え」や「願い」をむしろ明確にする。その中心は「生きる力」であり、乳児保育の実践構造では「生活適応力」を重視する。

それを保育目標として、2008年保育所保育指針のように子どもの内的操作、内面の育ちや「心情・意欲・態度」の育ちとする。

2、分析対象と方法

1) 分析対象

「乳児保育」のテキスト（55冊）に掲載されている指導計画の事例を対象とした乳児保育の指導計画事例が掲載されていたテキストは、55冊のうち35冊であった。指導計画が掲載されていないテキストは分析対象より除外した。掲載されていた事例は、表4に示すように117事例あった。ただし全てを事例としてではなく、より分析課題に近い学生が実習で乳児保育を体験することを想定した「1歳児の指導計画」をここから抽出した。これを対象としたのは、保育所保育指針を踏まえて指導計画論が述べられていることから、直接保育の現場からの事例よりも指針に即した検討になること、又、テキストとして取りあげられているので一定の妥当性が高いと考えたことによる。

以上の35冊を読み取りの対象とした。指導計画の種類に応じて分類したものが、表5である。年齢分布も示した。

さらに年間指導計画・月間指導計画、さらに週案の両方が掲載されている事例を抽出し、タイプ別に分類を行い検討する。ただし、全ての事例があがっている事例はなかった。主に、年案と月案を検討することにしたので、主要な分析対象は35冊（表4参照）のうち、16事例（表6参照年案・月案）であった。週案は35例から適切なものを選んで検討したが、あくまでも補足資料として考えた。

さらに4つのモデルの特徴を基準としてタイプ別に示したものが表6の「1歳児指導計画（年間指導計画・月間指導計画・週案）4つのタイプ別分類」である。

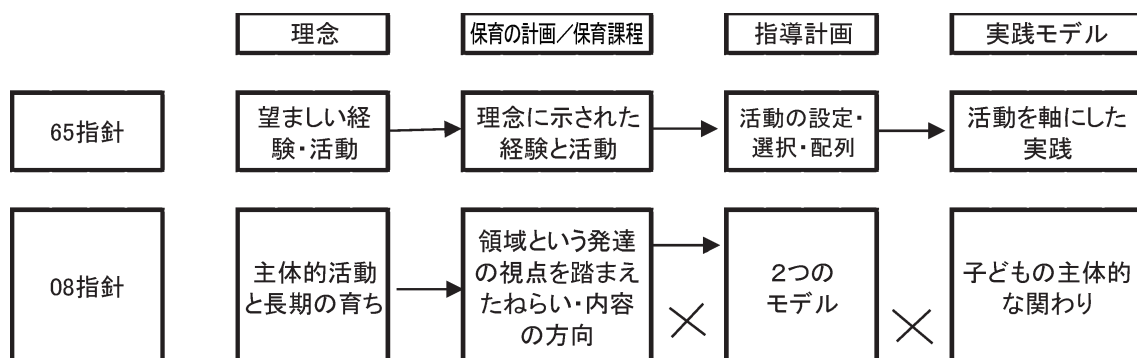


図5 指導計画と実践モデル

表4 「乳児保育」教科書に見られる指導計画の種別一覧

No	発行年	保育課程	年間指導計画			月間指導計画			週案			デイリー			計
			0歳	1歳	2歳	0歳	1歳	2歳	0歳	1歳	2歳	0歳	1歳	2歳	
1001	1973	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	10
1002	1974	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3
1003	1975	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	2
1004	1976	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	5
1005	1979	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	4
1006	1980	1	1	1	0	1	0	1	0	1	1	1	1	1	4
1007	1982	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0
1008	1984	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	1
1009	1986	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
1010	1986	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	3
1011	1990	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
1012	1992	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	3
1013	1992	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
1014	1992	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	3
1015	1993	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	3
1016	1995	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2
1017	1995	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
1018	1997	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
1019	1999	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
1020	2000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	5
1021	2001	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
1022	2002	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1023	2004	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
1024	2005	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	2
1025	2005	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	4
1026	2006	1	1	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0
1027	2006	0	1	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	8
1028	2007	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
1029	2009	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0
1030	2009	1	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	5
1031	2009	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
1032	2010	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
1033	2010	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	4
1034	2010	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	10
1035	2014	1	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	7
		9	19	6	1	20	5	4	11	4	4	23	7	4	117

表5 「乳児保育」教科書(表4)に見られる指導計画の種別分類

種類	保育課程	年間指導計画			月間指導計画			週案			デイリー			計
年齢		0歳	1歳	2歳	0歳	1歳	2歳	0歳	1歳	2歳	0歳	1歳	2歳	
	9	19	6	1	20	5	4	11	4	4	23	7	4	117
	9 (7.7%)	26 (22.2%)			29 (24.8%)			19 (16.2%)			34 (29.1%)			117 (100%)

2) 分析の基準と手続き

先に示す4つのタイプの特徴を基準とした。その際に、読み取りは筆者のほかこの4つのタイプを理解している他の研究者に依頼して読み取りを独立して行うことにした。一致度は90%であった。読み取りでは次のような課題が浮かび上がってきたが、共同で討議して評価を行った。

4つのタイプの特徴から示す分析基準

1のタイプとみなしたものは、「生活・遊び」といった活動、特に外的活動に視点を置いた枠組みになっているもの。

2のタイプとみなしたものは、「望ましい活動」といった保育者が選択した一貫した活動に視点を置いた枠組みになっているもの。

3のタイプとみなしたものは、「ねらい」特に活動の内的側面に視点を置いた枠組みになっているもの。

4のタイプとみなしたものは、「子ども主体」、特に活動の内的操作に視点を置いた枠組みになっているもの。

表6 1歳児指導計画（年間指導計画・月間指導計画・週案）
4つのタイプ別分類

図書No	発行年	年案	月案	週案
		タイプ	タイプ	タイプ
1004	1976	2	2	1
1005	1979	1	1	2
1006	1980	1	1	1
1008	1984	2	2	2
1009	1986	2	1	
1010	1986			1
1011	1990	1	1	
1014	1992	2	2	2
1015	1993	2	2	
1016	1995	1	1	1
1017	1995	2	1	
1018	1997	2	1	
1024	2005	1	1	2
1025	2005	2	2	
1026	2006	2	1	
1027	2006			2
1028	2007			1
1030	2009	4	4	4
1032	2010	3	3	

このことから、単純集計ではあるが、教科書に記載されているいくつかの事例を分類し、さらに検討する。

3、タイプごとの分類

1) 指導計画の種類別分類

表5は、「乳児保育」教科書（表4）にみられる指導計画を種類に応じて分類し、事例掲載年齢分布を示したものである。

種類で見ると、デイリーの事例が多く（29.1%）、次いで、月間（24.8%）・年間（22.2%）の順で週案（16.2%）が少なかった。年齢で見ると、0歳の掲載が多く、2歳は少数であった。

2) 1歳児年間指導計画におけるタイプ別分類（表7、図6）

表7、図6から1歳児の年間指導計画を分析した結果、②望ましい活動重視モデル（56%）が一番多く、ついで①単純活動モデル（31%）③ねらい重視モデル（6%）④主体重視モデル（6%）の順になった。

3) 1歳児月間指導計画における実践構造の分析結果（表8、図7）

表8、図7から1歳児の月間指導計画を分析した結果、①単純活動モデルタイプ（57%）が一番多く、ついで②望ましい活動重視モデルタイプ（31%）、③ねらい重視モデルタイプ（6%）④主体重視モデルタイプ（6%）の

表7 1歳児年間指導計画 4つのタイプ別割合

年案	1	2	3	4	計
実数	5	9	1	1	16
%	31	56	6	6	100

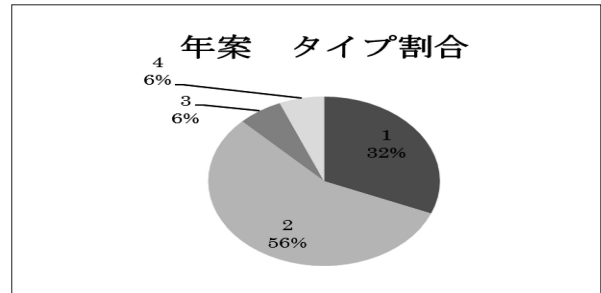


図6 1歳児年間指導計画 4つのタイプ別割合

表8 1歳児月間指導計画 4つのタイプ別割合

月案	1	2	3	4	計
実数	9	5	1	1	16
%	57	31	6	6	100

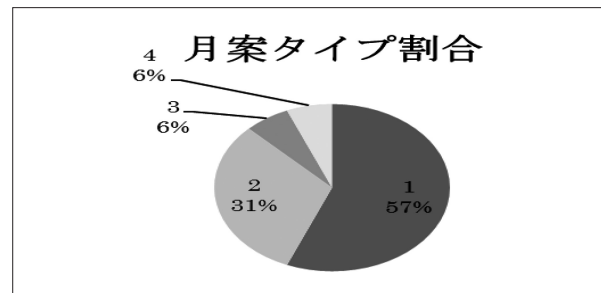


図7 1歳児月間指導計画 4つのタイプ別割合

順になった。

4) 1歳児週案における実践構造の分析結果（表9、図8）

表9、図8から1歳児の週案を分析した結果、①単純活動モデル（46%）が一番多く、ついで②望ましい活動重視モデル（45%）、④主体重視モデル（9%）、③ねらい重視モデル（0%）の順になった。（注：表6より週案は実数11例である。）

5) タイプごとの分類課題

以上のことから、大方らが検討した結果、読み取りでは次のような課題が浮かび上がってきた。

①②タイプは、「活動・経験」の視点から内容を方向付けようとしている。子どもの活動をどのようにとらえるのかという保育者の活動への考え方によって違いが見られた。

表9 1歳児週案 タイプ割合

週案	1	2	3	4	計
実数	5	5	0	1	11
%	46	45	0	9	100

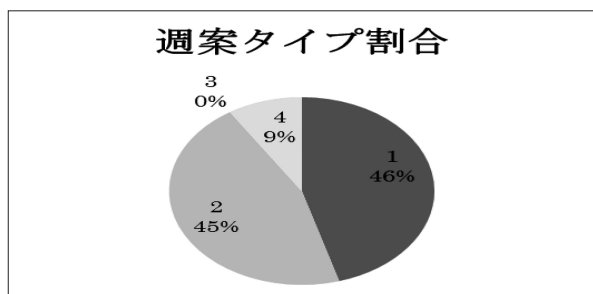


図8 1歳児週案 4つのタイプ別割合

②タイプの「活動」は、達成すべき目標として位置づけているため、「望ましい経験と活動」と示すことから「望ましい」という保育の「ねらい」を含んだものになっている。このため、「ねらい」はむしろ「活動内容」を表すことになっており、年間指導計画から月間指導計画への移行がわかりやすい実践構造ともいえ、一貫して同じタイプを使っていることが多かった。

③④タイプは、「ねらい」の視点から「養護」プラス「健康・言葉・環境・関係・表現」を方向付けようとしている。ただし「内容」は「ねらい」を細分化しているため、どちらも到達すべき子どもの姿といえる。年齢ごとの「ねらい」と「内容」の表示をしていない。このことは、乳児保育の実践構造を考える上で、「ねらい」と「内容」が抽象化してしまう可能性がある。そのため、創意工夫された多様なタイプが見受けられる。

③タイプの「ねらい」は、①②と異なり、「心情・意

欲・態度」という内的活動を示そうとしている。月間指導計画から具体的実践に近い日誌ではタイプを変えている場合があった。

④タイプは「ねらいと内容」を保育者がする事項と子ども発の活動への援助が示されている。2歳未満までの場合に、個別の指導計画を必要としているため、実践構造と指導計画の乖離が大きくなる。集団保育における指導計画については、「生活・遊びの流れに応じて」と書いてあるに過ぎない。

乳児保育の実践構造は、保育士等が行わなければならない事項を除き、子どもの環境へのかかわり次第ということになり、保育者の創意工夫しだいで多様な保育実践が可能となる。

Ⅲ、年間指導計画と月間指導計画の関係の読み取り

1、年間と月間の関係について

次に、本研究の中心的な課題である年間と月間の関係がどうなっているのかを検討した。1歳児の指導計画を先に示した基準から4つのタイプに分類することを試みた。1歳児指導計画（年間指導計画・月間指導計画・週案）を4つのタイプ別分類したものが表6である。

表6を基にして、年間と月間をクロスさせて整理したのが表10である。表10からわかることは、年間と月間の指導計画が同じタイプのもの（「一貫型」とここではよぶ）と異なるタイプを使っているもの（「多様型」とここではよぶ）に分類できた。

「一貫型」は、①単純活動モデルが一番多く（5例）、ついで②望ましい活動重視モデル（5例）、③ねらい重視モデル（例）④主体重視モデル（1例）の順になった。一方、「多様型」は、年間指導計画が②望ましい活動重視

表10 1歳児年間指導計画タイプから月間指導計画タイプへの転換

1歳児	月間指導計画	月間指導計画	月間指導計画	月間指導計画	計
年間指導計画	①単純活動モデルタイプ(5)	②望ましい活動重視モデルタイプ(9)	③ねらい重視モデルタイプ(1)	④主体重視モデルタイプ(1)	16冊
①単純活動モデル(5)	5	0	0	0	5
②望ましい活動重視モデル(9)	4	5	0	0	9
③ねらい重視モデル(1)	0	0	1	0	1
④主体重視モデル(1)	0	0	0	1	1
計	9	5	1	1	16

モデル→月間指導計画①単純活動モデルがみられた（4例）。

2、「一貫型」の実践構造

表10からわかるように、年間指導計画→月間指導計画へと同じタイプのもが見受けられる。例えば年間指導計画が①タイプ→月間指導計画①タイプが5例、年間指導計画が②タイプ→月間指導計画②タイプが5例、年間指導計画が③タイプ→月間指導計画③タイプが1例、年間指導計画が④タイプ→月間指導計画④タイプが1例ある。このことから、1歳児の指導計画においては、転換しない一貫型が「①単純活動モデル」、「②望ましい活動重視」モデルのタイプに多く見受けられた。乳児保育は、活動を軸にすることで実践構造が一貫したものとなる可能性を示している。しかもタイプ①だけではなく、タイプ②も一貫していることは「望ましい」という視点で一貫していることを示している。また、1例ずつであるが、タイプ③、タイプ④にも一貫型が抽出された。このことは、乳児保育では「外的活動」を実践構造とすることが妥当とテキストで示されていると考えることが可能である。これは保育実践の構造が外的活動を取り上げる傾向を示している。表6から週案が掲載されていた8事例を検討した。そのうち、年間指導計画が①タイプ→月間指導計画が①タイプ→週案①タイプが2件、年間指導計画が②タイプ→月間指導計画が②タイプ→週案②タイプが2件、年間指導計画が④タイプ→月間指導計画が④タイプ→週案④タイプが1例ある。このことから、1歳児の指導計画においては、週案との関係においても転換しない一貫型が「①単純活動モデル」、「②望ましい活動重視モデル」のタイプに多く見受けられる。

3、「多様型」の実践構造

表10からわかるように、年間指導計画→月間指導計画へと多様なタイプのもが見受けられる。例えば年間指導計画が②タイプ→月間指導計画①タイプが4例ある。このことは、1歳児の保育実践は、「②望ましい活動重視モデル」から「①単純活動モデル」へとタイプをかえる「多様型」など創意工夫がみられる。このことは、乳児保育の実践構造は、「活動」を重視しながらも「ねらい」との統合を模索している実践構造がわかった。さらに、表6から週案が掲載されていた8事例を検討した。そのうち、年間指導計画が①タイプ→月間指導計画が①タイプ→週案②タイプが2例、年間指導計画が②タイプ→月間指導計画が②タイプ→週案①タイプが1例ある。このことから、1歳児の保育実践は、週案との関係においても転換型があわせて3例、「①単純活動モデル」、「②望まし

い活動重視モデル」に見受けられる。このことから、乳児保育の保育実践は、「活動」と「ねらい」の統合を模索しながら多様なタイプが存在することがわかった。

以上、この4つのタイプを理論上乳児保育のあり方を検討するために提案し、さらに、「この4つのタイプは実際の指導計画に生きている」という試案を、あくまでも質的議論への布石として検証した。

IV、結論と今後の課題

1、主な結論

本論文では、乳児保育の実践構造の解明、すなわち乳児への働きかけの解明について検討し、わたしたちが提案した4つのモデルを使って実際の指導事例を検討した。結果として次のような結論を得た。

結論1としては、4つのタイプが対象として取りあげられる事例には全てのタイプが存在しており、その多くは活動型である。特に、年間指導計画・月間指導計画はどちらも①単純活動モデルと②望ましい活動重視モデルのタイプが多いことがわかった。さらに、年間指導計画と月間指導計画では月間指導計画のほうが①のタイプが多いことがわかった。いずれも活動型のタイプである。乳児保育は、活動を軸にすることで実践構造が一貫したものとなる可能性を示している。

結論2としては、1歳児の指導計画においては、転換しない一貫型が「①単純活動モデル」、「②望ましい活動重視」モデルのタイプに多く見受けられた。乳児保育は、活動を軸にすることで実践構造が一貫したものとなる可能性を示している。しかもタイプ①だけではなく、タイプ②も一貫していることは「望ましい」という視点で一貫していることを示している。また、1例ずつであるが、タイプ③、タイプ④にも一貫型が抽出された。このことは、乳児保育では「外的活動」を実践構造とすることが妥当とテキストで示されていると考えることが可能である。これは保育実践の構造が外的活動を取り上げる傾向を示している。一方、1歳児の保育実践は、「②望ましい活動重視モデル」から「①単純活動モデル」へとタイプをかえる「多様型」など創意工夫がみられる。このことは、乳児保育の実践構造は、「活動」を重視しながらも「ねらい」との統合を模索していることがわかった。このことから、乳児保育の保育実践は、「活動」と「ねらい」の統合を模索しながら多様なタイプが存在することがわかった。

結論3としては、事例を検討した結果、4つのタイプが全て抽出され、かつ、指導計画は、年間・月間ともに①と②のタイプが多いことがわかった。また、年間と月間を比較すると月間のほうが①のタイプが多いこと、さらに、週案を付け加えて検討したところ全て同じタイプを使用している「一貫型」といろいろなタイプを使っている「多様型」があることが分かった。このことから、乳児の実践には多くのタイプがあるが、各々タイプには意味があり、どれがよいかとはいえない。むしろ各々のタイプごとの課題を整理し、ねらいと内容の統合的理解の仕方、また、子どもの活動の理解の仕方を整理する必要があることを指摘した。

今回の検討を参考にして、実践構造での指導計画の分析へと発展させる必要がある。4つのタイプは、乳児保育の実践構造の質的検討をするためには有効な分類であること、特に、乳児の生活における子どもと保育者の内的側面についての客観的な分析によって、乳児保育の実践構造の適切性を検討できることが示された。

2、今後の課題

乳児保育の実践構造において、特に乳児の保育内容を考える際に、保育者と乳児の関係は保育内容そのものである。保育内容の定義・特徴理解とも関係している。今後は、今回の指摘から課題を検討し、資料の対象を緻密に検討すること、また月案を中心としてタイプの検討を行い、実践に生かすことを課題とする。

以上、乳児保育の実践構造を考えると、上記4つのタイプはいずれも適用可能ということになる。しかし、実践的には、いずれのタイプも乳児保育のモデルとして実際とは合っていないように思える。乳児保育の実践構造はどうあるべきかはほとんど整理されていないことになる。確かに、ある程度の枠組みはあるので実践プランを含む実践構造を評価することは可能であろう。例えば、実践プランがどこかに偏っていたり、段階があまりにも幼児的過ぎたりというような形での自己評価・保育所評価、改善という実践プランの背景を議論することは可能であると考えられる。そこで、取り出した活動モデルをつかって実践プランをイメージし、乳児保育の方向を検討する。

乳児保育の実践構造は、子どもの個人差や2008年保育所保育指針の発達区分以上に、保育者は乳児の何を育てるのかという働きかけを整理するという課題がある。しかし、保育実践を豊かにするということは、保育実践がどのような構造を持っているのかを知る必要があるにもかかわらず、まだ明らかではない。乳児保育における実践構造とは、子どもに働きかける保育者の保育実践としてどのような生活内容を考えるのかということである。

どのような保育方法で保育に臨めばよいのか、どのような視点から保育の振り返りを行えばよいのか、明日の保育にはどのようにつなげていくのかは、子どもの活動への内的側面の理解であり、保育者の子どもへの内的側面への働きかけであると考えられる。乳児保育の実践構造への提議は引き続き課題を探求し、継続的に研究を行う。

謝辞

本研究論文作成にあたり、大阪総合保育大学大学院玉置哲淳教授には多くのご指導ご助言をいただきました。心より感謝御礼申し上げます。また、大阪総合保育大学総合保育研究所、乳児プロジェクトのメンバーには、考察にあたりご意見ご示唆をいただきました。この場をかりまして感謝御礼申し上げます。

<引用・参考文献>

- 相場幸子 1988 「ピアジェの感覚運動的知能－早期発達援助の観点から－」 厚生労働省編北星論集（文）25号
- バターワース、J／ハリス、M 1997 「発達心理学の基本を学ぶ」 村井潤一監訳 ミネルヴァ書房
- Bredenkamp, S. and Copple, C.(ed.) 1997 Developmentally Appropriate Practice in Early Childhood Programs Revised Edition, NAEYC
- Copple, C and Bredenkamp, S.(ed.) 2009 Developmentally Appropriate Practice in Early Childhood Program Serving Children from Birth through Age 8 3rd edition NAEYC
- 福岡貞子、磯沢淳子 2007 「乳児の絵本の読み聞かせに関する一考察（その2）保育士養成校における乳児保育の授業内容を中心に」 大阪青山短期大学研究紀要（32）
- 福沢周亮監修 2012 「保育の心理学－子どもの心身の発達と保育実践－」 教育出版
- 船越利代子 2010 「“乳児保育” 授業における課題：保育所実習アンケート分析から」 紀要（38）
- 古橋紗人子、安井恵子 2012 「乳児保育の授業研究（1）予習重視のグループ討議と講義内容」 滋賀短期大学研究紀要（37）
- ゲゼル、A 1966 「乳幼児の心理学」 山下俊郎訳 家政教育社
- 萩尾ミドリ 2010 「保育者養成校における「乳児保育」の意義と理解－わかる授業をめざして」 久留米信愛女学院短期大学研究紀要33号
- 韓 仁愛 2003 「088 戦前期における乳児保育の内容と方法」 日本保育学会天会発表文集（56）
- 橋川喜美代、岩崎美智子、塩路晶子、小林友子 2005 「子どもの“こだわり”に寄り添う保育に貫かれる子ども理解と受容」 鳴門教育大学学校教育実践センター紀要19号
- 波多野完治編 1984 「ピアジェの発達心理学」 国土社
- 初塚真喜子 2010 「アタッチメント（愛着）理論から考える保育所保育のあり方」 相愛大学人間発達学研究
- 稲員祥子 2009 「『乳児保育』における保育学科学学生作成の3歳未満児の発達を促す手作りおもちゃ作品展示報告」 下関短期大学紀要28号

- 石橋由美、三好年江 2004 「授業評価と保育所保育実習との関係についての予備的研究:授業「乳児保育Ⅱ」の改善のために(創刊二十五周年記念号)新見公立短期大学紀要 25号
- 城ヶ峰直子 2004 「学生と沐浴人形との相互作用による一考察-学生の実態分析による「乳児保育」実践指導の在り方」尚綱短期大学研究紀要 幼児 36号
- 梶美保、神崎みち代、松生泰子、恵村洋子、豊田和子 2003 「乳児保育の質的向上をめざして(2):乳児期の保育内容“食援助について考える”」日本保育学会大会発表論文集(56)
- 梶美保、豊田和子 2007 「食援助のプログラム開発と実践改善-乳児保育の質的向上をめざして」高田短期大学紀要(25)
- 神田英雄 1998 「『受けとめる』『受容』についての実践提案の位置づけ」(第15回全国保育問題研究協議会・夏季セミナー報告「乳児保育」季刊保育問題研究(174))
- 金田利子 1980 「乳児保育における発達研究の理論と方法をめぐって-保育の構造と子どもの発達-」教育心理学会における自主シンポジウム 教育心理学年報 23, 93-94, 1984-03-30
- 金田利子、諏訪きぬ、土方弘子 2000 「『保育の質』の探究-『保育者-子どもの関係』を基軸として-」ミネルヴァ書房
- 柏木靈峰 2008 「子どもの権利を保障するための視点-子ども家庭福祉の再構築期を迎えて(特集、子どもの権利を守る)」月間福祉 91(1)、12-17
- 加藤繁美 2009 「対話と保育実践のフーガ」ひとなる書房
- 川島明希子、高坂悦子 2008 「お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(17):乳児保育実践の省察にむけて戸越ひまわり保育園訪問から」幼児の教育 107(5)
- 小林友子 1997 「矢倉乳児保育園での1歳児の絵の実践」日本保育学会大会研究論文集(50)
- 小林芳郎監修 2003 「子どもと保育の心理学-発達臨床と保育実践-」保育出版社
- 小林芳郎編 2007 「子どもを育む心理学」保育出版社
- 児嶋雅典、菅田栄子 2001 「保育者養成における乳児保育の構想:育児記録を用いた授業実践の試み(1)」松山東雲短期大学研究論集 32号
- 小西行朗 2009 「子育ての神話 発達神経医の立場から」心理学ワールド 46号
- 厚生労働省 2008 「保育所保育指針」フレーベル館
- 厚生労働省 2008 「保育所保育指針解説書」フレーベル館
- 鯨岡峻・鯨岡和子 2002 「保育を支える発達心理学」ミネルヴァ書房
- 黒岩英子、青山優子 2004 「乳児保育所1-2歳児運動遊びの実践と保育者の援助」西南女学院短期大学研究紀要 50号
- 光本弥生 2000 「保育構造論」についての一考察」中国四国教育学会 教育学研究紀要 46(1) 626-631
- 三好年江、石橋由美 2005 「授業「乳児保育Ⅱ」の模擬保育から学生が学んだこと」新見公立短期大学紀要 26
- 三好年江、石橋由美 2006 「初任保育者の担当クラスと子どもの遊びにかかわるときの問題意識からみた保育士養成校の課題」新見公立短期大学紀要 27
- 松生泰子、神崎みち代、恵村洋子、梶美保、豊田和子 2004 「乳児保育の質的向上をめざして(4):食援助の実践改善」日本保育学会大会発表論文集(57)
- 松生泰子、佐田恵子、恵村洋子、梶美保、豊田和子 2007 「食の意識調査と“食援助プログラム”に基づく実践改善:乳児保育の質的向上をめざして(第1部自由論文)」保育学研究 45(2)
- 松本寿通 1997 「乳児保育(平成7年度幼児保健講習会)日本医師会雑誌 116(5)
- 松本美紀 2008 「自分の思いをありのままに!!1・2歳児の実践(特集第47回全国保問研・岐阜集会提案)季刊保育問題研究(230)
- 松村和子、近藤幹生、花島香代 2012 「教育課程・保育課程を学ぶ」ななみ書房
- 文部科学省 2008 「幼稚園教育要領」フレーベル館
- 文部科学省 2008 「幼稚園教育要領解説」フレーベル館
- 森上史朗 1988 「よりよい実践研究のために」ミネルヴァ書房 別冊発達 7
- 森田健宏、井上千晶 2009 「乳児保育担当保育士の資質と養成機関の課題-乳児保育担当への不安と「学・職」連携教育による充実」夙川学院短期大学教育実践研究紀要(2)
- 無藤隆、高橋恵子、田島信元編 1990 「発達心理学入門Ⅰ-乳児・幼児・児童-」東京大学出版会
- 中川愛 2010 「保育士養成課程における学生の不安軽減を目指した授業実践の検討-乳児保育に対する学生意識調査」湊川短期大学紀要 46号
- 中井宏行、衣川文乃 「SIDSを考え、0歳児クラスで仰向け寝を実践して(特集 第38回全国保問研-静岡集会提案)(分科会提案-1-乳児保育)」季刊保育問題研究(176)
- 西村真美 2010 「『乳児保育』授業内容についてのテキスト項目の検討」大阪成蹊短期大学研究紀要(7)
- 野中千都 2008 「『乳児保育Ⅱ』の教授内容に関する一考察:学生によるアンケート調査より」(短期大学部保育課)西南女学院大学紀要 12号
- 大場幸夫 2007 「こどもの傍らに在ることの意味-保育臨床論考-」萌文書林
- 大場幸夫、網野武博、増田まゆみ 2008 「保育を創る8つのキーワード」フレーベル館
- 大方美香・小寺玲音・玉置哲淳 2012 「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討-乳児保育研究 その1-」大阪総合保育大学研究紀要第7号(67-94)
- 大宮勇雄 2006 「保育の質を高める」ひとなる書房
- ピアジェ、J 1988 「遊びの心理学」大伴茂訳 黎明書房
- 千田みつゑ、上田太枝子、工藤由紀 1992 「すみれ乳保育園一時的保育事業の実践(施設を地域の「とりで」に-大阪福祉事業財団の歴史と実践-3-保育施設実践レポート)」賃金と社会保障(1091)
- 清水益実 1984 「応用発達心理学の立場から:保育実践を通して『乳児保育』における発達研究を考える」(大阪堺市・いづみ保育園の実践から)(「乳児保育に関する発達研究の理論と方法をめぐって[IV]:保育の構造と子どもの発達」)教育心理学年報 23号
- 清水茂、久米マスミ、小林友子 「幼児教育実践理論の研究」鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 14号
- 新保育士養成講座編纂委員会編 2011 「保育の心理学」全国社会福祉協議会
- 塩川寿平、小林友子、野々目桂三、喜田周一、山田星史、富田

喜代子、山本卓、塩川成子 1997 「心を表現する幼児画の理論と実践について」 日本保育学会大会研究論文集 (50)

シルヴィーレイナ、星三和子 「保育の中に隠された価値観の日仏比較：乳児保育をめぐる」 日本保育学会大会発表論文集 (55)

菅田栄子、児嶋雅典 2002 「保育者養成における乳児保育の構想：育児記録を用いた授業実践の試み」 松山東雲短期大学研究論集 33号

社会福祉法人日本保育協会 2009 「わかる！できる！新保育所保育指針 実践ガイド」 中央法規出版株式会社

玉置哲淳 2002 「新版幼児教育課程論入門」 建白社

玉置哲淳 2008 「指導計画の考え方とその編成方法」 北大路書房

玉置哲淳 2010 「乳児の人権保育実践展開の視点と目標（討論）」 エデュケア 30

玉置哲淳 2011 「幼稚園におけるクラス経営論の課題と方向についての覚書－クラス経営の実証的研究所説－」

田代泰子 1985 『実践記録（1歳児保育）の分析から：「乳児保育」に関する発達研究の理論と方法をめぐって（Ⅴ）：保育園における保育者と子どもの関係：自主シンポジウム』 教育心理学年報 24

土方弘子 2000 「保育所保育指針と乳児保育実践の課題（特集 保育指針改定を考える）」 保育の研究 (17)

土谷長子、高内正子 2000 「演習授業におけるビデオの活用：乳児保特集Ⅱでの実践」 日本保育学会大会研究論文集 (54)

上村眞生・七木田敦 2008 「保育士のサポート源構造に関する実証的研究」 小児保健研究 vol.67. No.6

山下俊郎編 1965 「保育所保育指針解説」 ひかりのくに

横松友義／浅野泰昌／近行あさみ／姚金粧 2007 「これからの保育構造論構築に関する一考察」 岡山大学教育学部研究集録第 136号

吉葉研司、汐見稔幸、土屋みち子、松永静子 2001 『176 乳児保育における「保育者－子ども相互関係形成」の重要性について：保育実践が「親－子ども」関係の改善に与える影響』 日本保育学会大会研究論文集 (54)

<引用・参考「乳児保育」教科書> (年代順)

飯田和也 2015 朱書きでわかる！0歳児の指導計画ハンドブック ひかりのくに

飯田和也 2015 朱書きでわかる！1歳児の指導計画ハンドブック ひかりのくに

今井和子 2014 教育技術『新 幼児と保育』 小学館

今井和子 2014 教育技術『新 幼児と保育』 MOOK 0・1・2歳児の担任になったら読む本 育ちの理解と指導計画 小学館

川原佐公 2014 保育とカリキュラム 0・1・2歳児の指導計画書き方サポート ひかりのくに

川原佐公 2014 保カリ BOOKS 0・1・2歳児の指導計画書き方サポート ひかりのくに

大方美香 2014 総合保育双書2 乳児保育計画論 ふくろう出版

総合保育研究所（代表大方美香） 2014 総合保育双書2 乳児

保育計画論－2つのタイプの事例を比較して－ ふくろう出版

増田まゆみ 2013 Gakken 保育 Books 発達が見える！学研教育出版

増田まゆみ 2013 Gakken 保育 Books 発達が見える！0, 1, 2歳児の指導計画と保育資料 学研教育出版

佐藤暁子 2013 保育とカリキュラム BOOKS22 0～5歳児指導計画の書き方がよくわかる本 ひかりのくに

横山洋子 2013 記入に役立つ！0歳児の指導計画 ナツメ社

横山洋子 2013 記入に役立つ！1歳児の指導計画 ナツメ社

秋葉英則 2011 子どもと保育 0歳児改訂版 かもがわ出版

松本峰雄 2011 U-CANのよくわかる指導計画の書き方（0, 1, 2歳）ユーキャン学び出版

今井和子 2010 独自性を活かした保育課程に基づく指導計画－その実践・評価－ ミネルヴァ書房

川原佐公 2010 赤ちゃんから学ぶ「乳児保育」の実践力－保育所・家庭で役立つ－ 教育情報出版

乳児保育研究会 2010 改訂新版 資料でわかる乳児の保育新時代 ひとつなる書房

柴崎正行 2010 CD-ROM版 年齢別クラス運営① 0歳児のクラス運営 ひかりのくに

柴崎正行 2010 CD-ROM版 年齢別クラス運営① 1歳児のクラス運営 ひかりのくに

玉置哲淳 2010 乳児の人権保育シリーズ1 2歳児の人権保育 解放出版社

九州保育団体合同研究集会常任委員会 2009 「保育っておもしろい」 ブックレット 乳児保育 かもがわ出版

増田まゆみ 2009 新 保育ライブラリ 保育の内容・方法を知る 乳児保育 北大路書房

志村聡子 2009 はじめて学ぶ 乳児保育 同文書院

阿部和子 2007 演習 乳児保育の基本 萌文書林

松本園子 2006 新・乳児の生活と保育 ななみ書房

榊原洋一 2006 今求められる質の高い乳児保育の実践と子育て支援 ミネルヴァ書房

入江礼子 2005 シードブック 保育内容総論 建帛社

待井和江 2005 乳児保育 第5版（現代の保育学⑧） ミネルヴァ書房

高浜介二 2005 0歳児の保育 年齢別保育講座 ルック

高浜介二 2005 1歳児の保育 年齢別保育講座 ルック

高内正子 2005 乳児保育への招待－胎児期から2歳まで－ 北大路書房

港野悟郎 2004 0歳児・1歳児・2歳児のための乳児保育 光生館

テルマ ハームス 2004 保育環境評価スケール①<幼児版> 法律文化社

テルマ ハームス 2004 保育環境評価スケール②<乳児版> 法律文化社

渡邊保博 2004 実践に学ぶ 保育計画のつくり方・いかし方 ひとつなる書房

岸井勇雄 2003 保育・教育ネオシリーズ [3] 保育の計画と方法 同文書院

今井和子 2002 改訂新版 保育の計画・作成と展開 フレーベル館

- 吉本和子 2002 乳児保育—一人ひとりが大切に育てられるために— エイデイル研究所
- 秋葉英則 2001 シリーズ 子どもと保育 0歳児 かもがわ出版
- 秋葉英則 2001 シリーズ 子どもと保育 1歳児 かもがわ出版
- 岩堂美智子 2001 [改訂版] 新・乳児の発達と保育 ミネルヴァ書房
- 柴崎正行 2001 個と集団が育ち合う園生活 第1巻 0・1歳児クラス運営のすべて フレーベル館
- 柴崎正行 2001 新・保育講座⑤ 教育課程・保育計画総論 ミネルヴァ書房
- 荒井列 2000 新・年齢別クラス運営① 1～2歳児のクラス運営 ひかりのくに
- 川原佐公 2000 新・年齢別クラス運営① 0～1歳児のクラス運営 ひかりのくに
- 待井和江 2000 乳児保育—その理論と実践— ウェルビーイング株式会社
- 飯田和也 1999 指導計画立案ノート 0歳児の指導計画～考え方と具体例～ ひかりのくに
- 飯田和也 1999 指導計画立案ノート 1歳児の指導計画～考え方と具体例～ ひかりのくに
- 迫田圭子 1999 養成校と保育室をつなぐ理論と実践—見る・考える・創りだす乳児保育 萌文書林
- 玉井美和 1999 保育の実践アイデア事例集—1日・週・月別保育指導計画の作り方—新教育要領・保育指針に基づく活動— 学事出版
- 米山千恵 1998 シリーズ・ゆとりと充実のある保育園づくり <2> 1歳児クラスの楽しい生活と遊び 明治図書
- 川原佐公 1997 乳児保育総論 保育出版社
- 米山千恵 1997 シリーズ・ゆとりと充実のある保育園づくり <1> 明治図書
- 阿部和子 1995 乳児保育—子どもの豊かな育ちを求めて— 萌文書林
- 待井和江 1995 乳児保育 第3版(現代の保育学⑧) ミネルヴァ書房
- 「新保育所保育指針の実践的解説」編集委員会 1995 新保育所保育指針の実践的解説 全国社会福祉協議会
- 北郁子 1993 0歳児クラスの保育実践 中央法規出版
- 土山忠子 1993 教育・保育双書第18巻 乳児保育 北大路書房
- エドワードC.メルフィッシュ 1992 乳児保育の国際比較 保育の新しい潮流 チャイルド出版
- 井坂由美子 1992 現代の乳児保育 建帛社
- 川原佐公 1992 乳児保育 楽しい乳児保育をめざして 三晃書房
- 千羽喜代子 1990 保育講座11巻 乳児保育 ミネルヴァ書房
- 村山貞雄 1986 乳児保育 学術図書出版社
- 菅俊夫 1986 乳児保育I・II 学術図書出版社
- 待井和江 1984 乳児保育(現代の保育学⑧) ミネルヴァ書房
- 坂田亮 1984 乳幼児保育指針 日本小児医事出版
- 吉岡毅 1982 新版 乳児保育 光生館
- 朽尾勲 1981 新訂 0・1・2歳児の指導計画 教育情報出版
- 土山忠子 1980 乳児の保育 建帛社
- 待井和江 1979 乳児保育 東京書籍株式会社
- 二木武 1976 乳児保育 同文書院
- 松本武子 1975 乳児保育要説 家政教育社
- 宮下俊彦 1974 「2歳児保育」年齢別保育実践シリーズ③ 全国社会福祉協議会
- 吉岡毅 1974 乳児保育 光生館
- 伊藤忠好 1973 乳児保育の原理 福村出版
- 宮下俊彦 1973 「0歳児保育」年齢別保育実践シリーズ① 全国社会福祉協議会

Structures in Infant Nursing Practices in Childcare Policy: Early Childhood Care Research, Part 2

Mika Oogata

Osaka University of Comprehensive Children Education

Abstract

This paper explores the structure of infant nursing practices, and more specifically, the structure of engagement with infants. Although studies have begun to investigate the importance of infant nursing in recent years, basic problems on the structure of the nursing practice have yet to be investigated. In our previous investigation [[This citation was changed to avoid presenting a reference in the abstract, which is discouraged by most journals. Please confirm.]], we examined nursing policies of childcare facilities in 1965 and 2008, and found a total of four types of practice structures, two from the 1965 facility nursing policies—the simple activity model and the ideal activity focus model—and two from the 2008 childcare facility nursing policies—the objective-focused model and the independent-focused model. We then previously proposed structures of infant nursing practices based on these findings. In the present study, we examine structures of infant nursing practices in specific cases of infant nursing. We found all four types of practices structures in our examination of case results, with the simple activity model and the ideal activity focus model occurring frequently within yearly and monthly curriculums. Furthermore, the simple activity model was seen with greater frequency in the monthly curriculums. Additional examination of weekly plans revealed two patterns of usage, one where a single model was used (“consistency model”), and one where a variety of models was used (“varied model”) [[Please confirm that the text reflects your intended meaning]]. These findings suggested that there are many types of infant nursing practices, and that each has its own unique significant and positive aspects. Issues with each type of model need to be clarified, and objectives, content, and infant comprehension of activities require further examination. Given the current findings, analysis of the curriculum plans of practice structures must also be developed further. This report demonstrates that the four models are effective categorizations for the qualitative examination of the structure of infant nursing practices, and additionally that it is particularly important to use these models to examine the appropriateness of practice structures through objective analysis on internal aspects of infants and their caregivers.

Key words : infant nursing, curriculum, childcare nursing policies